

シーボルトと紫陽花

池松 孝子

文政六年（1823）オランダから来日したシーボルトは、ドイツ生まれの医師、博物学者であった。そして日本で植物採集を行っていたいわゆるプラントハンターの草分けでもあった。

十五世紀のヨーロッパ諸国は富を求めて世界中に軍艦を派遣した。その軍艦には必ずプラントハンターが同船していたという。プラスチック、化学繊維のない当時、植物は食料、香料、医薬品、繊維等に利用される有用な資源で、その経済的価値の高い植物資源を持ち帰ることがプラントハンターの任務だった。十八世紀にはイギリス帝国がプラントハンターの担い手となって植民地をはじめ世界中から動植物を収集し、研究機関であるキューガーデンを設立し、特にオランダとは激しい競争をしていた。かのペリーが来日した際にも黒船にはプラントハンターが二人乗船していたという。

鎖国の長崎出島には遊女以外の女性が入ることは禁じられていた。そこに患者としてやってきたのが遊女「其扇そのあき」だった。シーボルトはひと目でこの女性に夢中になってしまった。彼女の本名は「お滝さん」。あの「蝶々夫人」のピンカートンは蝶々さんを「現地妻」とした。これに対し、シーボルトはすぐにお滝さんの両親に結婚を懇願している。二人には「お稻さん」という子供も生まれるが、一時帰国の荷物の中に持ち出し禁止の日本地図、葵の紋の羽織などが見つかりスパイ容疑で国外追放となった。

帰国したシーボルトはたどたどしい日本語でお滝さんに手紙を送ったが、お滝さんは親戚の勧めで再婚したことを彼に伝えている。後にシーボルトが刊行した「日本植物誌」には、長崎で採取した紫陽花を「ハイドランゼア オタクサ」と命名したとある。この「オタクサ」は別の学者によって既に名がついていた品種と分かり無効とされた。

紫陽花や白より出でし浅みどり

渡辺 水巴

今でも長崎では二人の愛の物語に託された紫陽花の名にまつわる土産をたくさん目にする。